

令和2年度 卒業論文

森見登美彦作品における表現特性

大阪教育大学 教育学部

教員養成課程 小中教育専攻 国語教育コース

国語表現ゼミナール

172315 小山 遼太

指導教員 野浪 正隆先生

令和3年 1月29日 提出

(原稿用紙換算 176枚)

目次

序章 研究動機・研究目的

第一章 研究概要

第一節 研究対象

第一項 森見登美彦について

第二項 研究対象

第二節 研究方法

第二章 研究結果

第一節 各表現の特徴

第一項 比喩表現について

第二項 形容表現について

第三項 分析結果

第三章 表現特性

第一節 言葉の提示の仕方

第一項 李白－『夜は短し歩けよ乙女』

第二項 詭弁踊り－『夜は短し歩けよ乙女』

第二節 表現の変化

第一項 『夜は短し歩けよ乙女』における「私」と彼女

第二項 『宵山万華鏡』における妹

第三節 森見作品におけるキーワード

第一項 お酒

第二項 夜

第三項 黒髪の乙女

第四章 森見登美彦と京都

第五章 結論と今後の展開

第一節 結論

第二節 今後の展開

終章 おわりに

序章 研究動機・研究目的

2017年9月にシッチェス・カタロニア国際ファンタスティック映画祭のアニメーション部門にノミネートされた森見登美彦原作『夜は短し歩けよ乙女』がメディアにも取り上げられ、また『四畳半神話大系』など他作品もアニメ配信が行われるなど森見登美彦作品は世間の注目を集めた。私は本屋で原作が気になり『夜は短し歩けよ乙女』を購入し読むと、登場人物たちのキャラクターや言動が特徴的で物語世界へ引き込まれるような感覚を覚えた。そこで、登場人物らが行う比喩、形容の表現の仕方がそれらの印象を生み出していると感じ森見登美彦作品における表現特性を明らかにしたいと考え、今回の研究に至った。

本研究は森見登美彦の小説における表現特性を明らかにしていくものである。それぞれの作品冒頭における比喩表現、形容表現を取り上げ、喩詞、被喩詞、形容など物語を構成する要素について分析し、全体的にどのような傾向があるのか、またそれぞれの要素間でどのような関わりがあるのかということを明らかにしながら、考察を行う。

第一章 研究概要

第一節 研究対象

第一項 森見登美彦について

1979（昭和54）年、奈良県生れ。奈良県生駒市出身。奈良市在住。ペンネームは本名の姓「森見」に、この地にゆかりの深い登美長髓彦を合わせたもの。奈良女子大学文学部附属中学校・高等学校（現：奈良女子大学附属中等教育学校）卒業。京都大学農学部生物機能科学科応用生命科学コースを卒業、同大学院農学研究科修士課程修了（修士（農学・京都大学））。在学中は体育会のライフル射撃部に所属した。

2003（平成15）年、『太陽の塔』で日本ファンタジーノベル大賞を受賞し、作家デビュー。2007年、『夜は短し歩けよ乙女』で山本周五郎賞を受賞。2010年『ペンギン・ハイウェイ』で日本SF大賞を受賞する。14年『聖なる怠け者の冒険』で第2回京都本大賞、17年『夜行』で第7回広島本大賞を受賞。ほかの著書に『四畳半神話大系』『きつねのはなし』『新釈 走れメロス 他四篇』『有頂天家族』『美女と竹林』『恋文の技術』『宵山万華鏡』『四畳半王国見聞録』『有頂天家族 二代目の帰朝』『太陽と乙女』『熱帯』がある。

参考文献・URL

森見登美彦 著者プロフィール 新潮社

<https://ddnavi.com/person/3998/> 森見登美彦 ダ・ヴィンチニュース

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A3%AE%E8%A6%8B%E7%99%BB%E7%BE%8E%E5%BD%A6> ウィキペディア 森見登美彦

第二項 研究対象

今回の研究では、「走れメロス」の新釈や短編小説は研究対象に含めず、小説を主に分析の対象とする。

作品	刊行年	出版
『太陽の塔』	2003年12月	新潮社
『四畳半神話大系』	2005年1月	太田出版
『夜は短し歩けよ乙女』	2006年11月	角川書店
『恋文の技術』	2009年3月	ポプラ社
『宵山万華鏡』	2009年7月	集英社
『四畳半王国見聞録』	2011年1月	新潮社
『有頂天家族』	2015年2月	幻冬舎

それぞれの作品においては、第一章または物語冒頭部(例：『四畳半神話大系』の場合、第一話四畳半恋ノ邪魔者 p5~96 まで)をそれぞれ取り上げ研究対象とする。その中で、比喩表現(比喩、換喩)と形容表現(人物、建物その他の情景に関する)を抽出する。

第二節 研究方法

今回、森見登美彦作品における表現特性を研究するため、比喩表現と形容表現を取り上げる。

比喩表現については、隠喩と換喩にそれぞれ以下の点で分類を行った。

○隠喩

「類似性」に基づく。例えば「菓子」→「ケーキ」、「父」→「母」のように、同義的なものから色、形、機能などさまざまな面での類似性が感じられるものである。「菓子」と「ケーキ」は甘いもの、「父」と「母」は親という点において共通している。以下にはその一部を示す。

(例)

『太陽の塔』

「しかし、彼女への恋情や自己憐憫に足をとらわれていては冷静な研究は不可能であると断じ、私はすぐさま、もたもたと身体にまわりつく感情の糸を切断した。」

まわりつく→感情の糸

未練が残るという点において「類似性」が見られる。また感情を糸として喩えることで、後述の「切断した。」という、未練を断ち切るという「私」の心情を強調している。隠喩。

巻き付いていて簡単に離れていかないことを「糸」によって表している。これが「ひも」であった場合イメージが違ってしまう。なかなか離れていかないもどかしさを表現することは難しくなる。

○換喩

「近接性」に基づく。「白」→「雪」、「砂糖」→「甘い」というように、二つのものがいろいろな意味で近くに接して存在していると感じられるものである。またこの場合、空間的な共在ということだけでなく、時間的な近接（「寝る」と「眠る」）、因果関係に基づく近接（「黒雲」と「雨」）、部分と全体（「指」と「手」）といった場合が考えられる。以下にはその一部を示す。

(例)

『有頂天家族 二代目の帰朝』

「ふいに姿の見えない巨人が揺さぶっているように、森の木々がざわめきだした。」

巨人の揺さぶり→森の木々のざわめき

大きな揺れ、衝撃という点において「近接性」に基づく換喩である。

これが「大きな風によって」などの表現であった場合、木々のざわめきをイメージすることはできるが、「姿の見えない巨人が揺さぶっているように」という表現によって、普通ではないそのざわめきをイメージさせたり、後の天狗つぶてが落ちてくる前触れのような動きをしている。

また、形容表現については森見登美彦作品の特徴でもある饒舌な形容を主に取り上げた。以下にはその一部を示す。

(例)

『四畳半神話大系』

「七転八倒の孤独な心理的暗闘を演じている私」

「七転八倒の孤独な心理的暗闘」が「私」（作者）独特の表現である。「心理的暗闘」という表現にオーバーさを感じ

じさせ、「私」自身によって語られることでより苦悩や苦しみを感じさせる。

参考文献

『ことばの詩学』 池上嘉彦 岩波書店 1992年12月15日 第1刷発行

第二章 研究結果

第一節 各表現の特徴

第一項 比喻表現について

分析を行っていくと、語と対象が結びついているものが見られる一方で、喩詞と被喩詞の間には、言葉の性質上の「ズレ」が生じているものがいくつか見られた。各作品でまとめたものが以下の表である。

作品	語と対象が結びついているもの	ズレが生じているもの
『太陽の塔』	<p><u>あたかも大正時代の十四の乙女のように(恥じらう我々)</u></p> <p>大正時代の十四の乙女→我々</p> <p>本文における「私」や小津の行動や言動から考えると結びつきにくい、連想しにくい喩詞であるが、恥じらいという点においては「近接性」に基づく換喩である。</p>	<p><u>男だけのフォークダンスを踊り狂った。</u></p> <p>フォークダンス→男子だけの世界</p> <p>他者と息を合わせその世界にのめり込むことを「フォークダンス」で表している。同じ共同活動でもこれが「パーティー」などの場合は、夢中な様子は表せるが閉塞性を表すことは難しい。</p>
	<p><u>もたもたと身体にまとわりつく(感情の糸)を切断した。</u></p> <p>まとわりつく→感情の糸</p> <p>未練が残るという点において「類似性」が見られる。また感情を糸として喩えることで、後述の「切断した。」という、未練を断ち切るという「私」の心情を強調している。隠喩。巻き付いていて簡単に離れていかないことを「糸」によって表している。これが「ひも」であった場合イメージが違ってしまう。なかなか離れていかないもどかしさを表現することは難しくなる。</p>	<p><u>日夜どんな研磨剤で磨き立てれば、ここまで鋭くなれるのであろうか(植村嬢の勘の鋭さ)</u></p> <p>研磨剤→勘の鋭さ</p> <p>鋭く研ぐ、という点においては両方の言葉に「近接性」が見られるが、勘は実体のないものであり、物理的に研磨剤で磨くというイメージと結びつきにくい。</p>
	<p><u>自分が玉子豆腐のようにぶるぶる震えていたことなどおくびにも出さず、あたかも自分の威光の前に私が罪過を悔いてひれ伏したがごとき情景を彼女に伝えるにちがいない。</u></p> <p>玉子豆腐→男性</p> <p>震える、揺れるという点において「類似性」に基づく隠喩である。</p>	
	<p><u>私の彼女に対する評価は世界大恐慌時の株値なみに暴落した。</u></p> <p>世界大恐慌時の株値なみの暴落→私の彼女に対する評価</p> <p>暴落した、という点において「近接性」に基づく換喩である。</p>	
	<p><u>我々の存在によって発生する経済効果は、冬眠熊の経済効果とほぼ等しい。</u></p> <p>冬眠熊の経済効果→我々の存在によって発生する経済効果</p> <p>生産性がない、何も生み出さないという点において「近接性」に基づく換喩である。</p>	
	<p><u>この調子で寒くなってゆけば二月本番には昭和基地の風呂場なみに寒くなるにちがいない。</u></p> <p>昭和基地の風呂場→部屋の寒さ</p> <p>寒さ、という点において「近接性」に基づく換喩である。ややオーバーさを感じさせる。</p>	
	<p><u>それはまるで、ごたごたと建て込んだ暗い街の中を、明るい別世界を詰め込んだ箱が走って行くように見え、私はひどく気に入っていた。</u></p> <p>箱→電車</p> <p>長方形の形、という点において「近接性」に基づく換喩である。「明るい別世界を詰め込んだ箱」という表現が、妄想しがちな主人公の私、現実世界にファンタジーの世界を組み込む森見作品の特徴がうかがえる。</p>	

<p>『夜は短し歩けよ乙女』</p>	<p><u>路傍の石ころに甘んじた(私の苦渋の記録)</u></p> <p><u>路傍の石ころ→私</u></p> <p>目に留まらない、主役になれないという点で「類似性」にもとづく隠喩である。「路傍の石ころ」は山本有三の「路傍の石」から引用していると考えられる。</p>	<p><u>トドが不貞寝しているようなその背中(酔った男性の背中)</u></p> <p><u>トドが不貞寝しているような→男性</u></p> <p>トドと男性がそもそも結びつきにくい上に、「不貞寝」という言葉が加わることでより複雑な喩えとなっている。</p> <p>脱力感を「トド」によって表している。もし「ライオン」などの躍動感が感じられる動物であった場合、この脱力感を表すことが難しい。</p>
	<p><u>杏仁豆腐の味にも似た(人生の妙味)</u></p> <p><u>杏仁豆腐の味→人生の妙味</u></p> <p>「私」(筆者)にとって杏仁豆腐の味が複雑、妙味として捉えており、そういった点を「私」の人生そのものや、起こった出来事と重ねている。このことから「近接性」に基づく換喩である。</p>	<p><u>胡瓜の尻尾へ砂鉄をまぶしたよう(東堂の顔)</u></p> <p><u>胡瓜の尻尾へ砂鉄をまぶしたよう→東堂の顔</u></p> <p>胡瓜の尻尾に砂鉄をまぶすというような状況に馴染みがない。東堂の特徴的な顔がズレによって伝えられている。東堂の顔のざらざらした感じを「胡瓜の尻尾」「砂鉄」によって表現している。これが「にんじん」や「ごま」であった場合、ざらざらをイメージすることが難しかったりまた弱められてしまう。</p>
	<p><u>招き猫の手のような(愛らしさ)</u></p> <p><u>招き猫の手→彼女の手</u></p> <p>愛らしさを「招き猫の手」によって表現している。これが「店頭でのキャッチ」のような表現が使われれば、呼び込む様子は表現できるが愛らしさは難しい。</p>	<p><u>小さな町並は、木屋町と先斗町の間押し込められた迷宮のように(町並)</u></p> <p><u>迷宮→町並</u></p> <p>入り組んだ、窮屈な様子を喩えており「近接性」に基づく喩えである。</p> <p>窮屈、入り組んだ複雑な様子を「迷宮」によって表している。これが「刑務所」などであった場合、窮屈な様子は表現できるが入り組んだ複雑なイメージは難しい。</p>
	<p><u>二足歩行ロボットめいた(足踏み)</u></p> <p><u>二足歩行ロボット→彼女の足踏み</u></p> <p>関節が伸びたような、たどたどしい様子を喩えており、「類似性」に基づく隠喩である。</p> <p>夜の街に慣れていない、どこかたどたどしい様子を「二足歩行ロボット」によって表している。</p>	<p><u>奇妙奇天烈なサーカス団のようでもあり、小さな祇園祭を勝手に開催しているよう(我々)</u></p> <p><u>サーカス団、祇園祭→我々</u></p> <p>賑やかな様子をややオーバーに伝えているが、「近接性」に基づく換喩である。賑やかな様子を「サーカス団」「祇園祭」によって表している。これが「お祭り騒ぎ」であった場合、その賑やかさはイメージできるが、それだと人数を考慮すれば妥当さを感じさせ、その大きさがイメージしにくい。</p>
	<p><u>沈没する豪華客船のように水底へ沈んでいくような感じ(酒場の一角へ)</u></p> <p><u>沈没する豪華客船→私たち</u></p> <p>徐々に、深く沈んでいくというような様子を喩えており、「類似性」に基づく喩えである。ゆっくり時間をかけて、というのが「豪華客船」によって表されている。これが「ボート」や「漁船」であった場合、ゆっくり時間をかける、というイメージが難しくなる。</p>	
	<p><u>百年の知己のように人々の中へ溶け込み、(羽貫さん)</u></p> <p><u>百年の知己→私たち</u></p> <p>初対面と思えないほど仲がよい、盛り上がっている様子を喩えており、「近接性」に基づく換喩である。驚くほどの親しさを「百年の知己」によって表している。これが「友人」や「親友」であれば、その</p>	

	深い親しげな様子をイメージすることは難しい。	
	<p>焼きすぎた餅のように(私)</p> <p>餅→私</p> <p>膨れた様子の喩えであり、「類似性」に基づく喩えである。私の顔の変化について「焼きすぎた餅」によって表している。これが「風船」であった場合、その変化の過程にほぼ差がなく、私の変化についてイメージが難しい。</p>	
『恋文の技術』	<p>むかしの刑事ドラマに出てくる犯人みたいな(ジャンパー)</p> <p>刑事ドラマに出てくる犯人→ジャンパー</p> <p>「私」視点によるジャンパーの見た目という点において、「近接性」に基づく換喩である。</p>	<p>美しき花嫁のれんを鼻息でかきわけるようにして書店に乗り込んだのだ が、(私)</p> <p>鼻息でかきわけるようにして一書店に乗り込んだ(興奮)</p> <p>「私」の興奮を伝えているが、鼻息でのれんをかきわけることは物理的に難しいためオーバーさを感じさせ、桃色映像に興奮する「私」の様子をより強調して伝えている。</p> <p>これが「手でかき分ける」だった場合、「私」の興奮を伝えることは難しい。</p>
	<p>この詩の破壊力を前にすれば、どんな懐の深い女性も裸足で逃げ出さ だろ。(詩の破壊力、下劣さ)</p> <p>どんな懐の深い女性も裸足で逃げ出す一詩の破壊力</p> <p>衝撃、下劣さという点において「近接性」に基づく換喩である。</p> <p>これが「どんな女性も驚く」であった場合、その詩の衝撃は表せるが「破壊力」という点では伝えるのはやや難しい。</p>	<p>ストレスのために全身のうぶ毛が抜け、七色の大便を排泄する特異体質と なれり。(追い込まれた私の現状)</p> <p>全身のうぶ毛が抜け、七色の大便を排泄する特異体質→私の現状</p> <p>喩えとして使われる表現が現実ではありえないため、多忙に追われストレスがたまっている私の現状をオーバーに、ユーモアを持って伝えられている。</p> <p>これが「倦怠感を感じる」などの表現であった場合、その異常な多忙さや受けるストレスについて表現することは難しい。</p>
		<p>片っ端から書いては返し書いては返し、まるで斬って斬って斬りまくる武 道の達人のようである。(私の文通生活)</p> <p>武道の達人→私の文通生活</p> <p>武道の達人という喩詞が文通生活という被喩詞と結びつきにくい。熱心に手紙を返している「私」の現状をオーバーさを感じさせながら伝えている。</p> <p>この表現が「作家のようである。」などであった場合、一つ一つこなしていくということは表現できるが、その勢いについては表現が難しい。</p>
		<p>このままではコンクリ詰めされて七尾湾に沈められる。(谷口さんの不機 嫌な様子)</p> <p>コンクリ詰め～谷口さんの不機嫌な様子</p> <p>谷口さんの「私」に対する怒り、ヘイトを表現しているがドラマや映画でよく使われるような表現であり、現実味を感じないためオーバーさを持って伝えられている。</p> <p>この表現が「研究所を追い出される」などであった場合、不機嫌な様子は表せるが、「私」に対する強い嫌悪や怒りの様子を表すことは難しい。</p>

		<p>そんな無謀な作戦が功を奏するのは、地球がブラックホールに飲み込まれる可能性よりも低い。</p> <p>地球がブラックホールに飲み込まれる可能性→小津の作戦の成功する確率</p> <p>三枝さんと恋に落ちるために考えた小松崎の作戦の成功率が低いことを表現しているが現実的にも確率が低い事象を引き合いにだしているため、オーバーさを感じさせる。</p> <p>この表現が「糸を針の穴に通す」などであった場合、可能性の低さを表すことはできるが、ほとんど皆無、成功率がゼロに近いことを表すのは難しい。</p>
『四畳半神話大系』	<p>性根がラビリンスのように曲がりくねった小津という人物(小津)</p> <p>ラビリンス→性根</p> <p>まっすぐではない、曲がっている、という点において「類似性」に基づく隠喩である。</p>	<p>よってたかって私を踏みつぶし、すき焼きの具にもならない汚い肉片に変えてしまったことであろう。(私のこれまでの振る舞い)</p> <p>汚い肉片→私の振る舞い</p> <p>汚い、周りからの悪評という点においては「近接性」が見られるが、「すき焼きの具にもならない肉片」という喩詞はややオーバーさを感じさせる。また「私」という被喩詞とのズレを感じさせる。この表現が「馬に蹴られる」などであった場合、踏みつぶされたということは表せるが、よりその悲惨な状態、もはや人間ではない状態を表すことはできない。</p>
	<p>そんな中世ヨーロッパの城塞都市のように堅固な彼女にも、唯一弱点があった。</p> <p>城塞都市→彼女</p> <p>隙がない、理性を感じさせるという点においては「類似性」に基づく隠喩である。</p>	<p>なんだか月の裏側から来た人のような顔色をしていて甚だ不気味だ。(当初の小津の印象)</p> <p>月の裏側から来た人→小津</p> <p>不気味、という点においては「近接性」が見られるが、「月の裏側から来た人」という喩詞がイメージを持ちにくく、小津という被喩詞とも結びつきにくいいため、「私」から見た小津の不気味さがより際立つ。この表現が「青白い顔」であった場合、異質な様子は表現できるが不気味な様子は難しい。</p>
	<p>大正時代の高利貸しのような不吉な顔をした男(小津)</p> <p>大正時代の高利貸し→小津</p> <p>不吉という点や「高利貸し」という言葉が持つマイナスイメージが「近接性」に基づく換喩である。</p>	<p>他人の不幸をおかずにて飯が三杯喰える。(小津の性格)</p> <p>他人の不幸→おかず</p> <p>「他人の不幸」と「おかず」という言葉が性質上結びつかない。「おかず」はプラスイメージを持つが「他人の不幸」はマイナスイメージであるため、ズレが生まれており小津の性格の悪さが強められている。この表現が「他人の不幸を喜ぶ」などであった場合、小津の「私」から見た他者よりも顕著な性格の悪さを表現することは難しい。</p>
		<p>そういう彼の顔も我が下宿の共同便所のように薄汚い。(小津の顔)</p> <p>共同便所→小津の顔</p> <p>汚い、という点においては「近接性」が感じられるが、「共同便所」という喩詞が「顔」という被喩詞は結びつかない。そのズレが「私」から見た小津の顔の汚さを強めている。この表現が「ほこりを被ったように」などの場合、汚さは表現できるが、「私」から捉えた小津の他の追隨を許さな</p>

		いほどの汚さを表現することは難しい。
		<p>小津はまるで人が馬糞をつまみ食いしている秘密の現場を目撃したような目つきをした。</p> <p><u>人が馬糞をへー目つき</u></p> <p>人が馬糞を食べる、という状況がそもそも非現実的である。そのズレやオーバーさが小津の驚いた表情を面白おかしく表現している。この表現が「人が盗みを働いている秘密の現場」であった場合、驚きを表現することはできるがその想像もつかない驚きの様子を表すことは難しい。</p>
『有頂天家族 二代目の帰朝』	<p><u>(弁天からの手紙を)正倉院御物のように大切にしていた。</u></p> <p><u>正倉院御物→手紙</u></p> <p>価値がある、大切にしているという点において「近接性」に基づく換喩である。これが「宝物のように」という表現であった場合、その大切にしている様子は表現できるが、「正倉院宝物のように」という表現によって、その普遍性や何よりも大切にしている赤玉先生の様子がイメージできる。</p>	<p><u>その斜面の中腹に、ブルサイドのアイスクリーム紅白縞のパラソルがあって、四人の鞍馬天狗たちが丸テーブルを囲んで花札に熱中していた。</u></p> <p><u>ブルサイドのアイスクリーム屋→パラソル</u></p> <p>一般的に天狗は伝説、空想上の生物であり、この物語にとっても裡視点で恐れの対象でもあるが「ブルサイドのアイスクリーム紅白縞のパラソル」という表現が、そういった天狗のイメージとのズレを生み出し、緊迫した場面でありながらも面白さを感じさせる。</p>
	<p><u>ふいに姿の見えない巨人が揺さぶっているように、森の木々がざわめきだした。</u></p> <p><u>巨人の揺さぶり→森の木々のざわめき</u></p> <p>大きな揺れ、衝撃という点において「近接性」に基づく換喩である。これが「大きな風によって」などの表現であった場合、木々のざわめきをイメージすることはできるが、「姿の見えない巨人が揺さぶっているように」という表現によって、普通ではないそのざわめきをイメージさせたり、後の天狗つづてが落ちてくる前触れのような働きをしている。</p>	<p><u>レンゲの花咲く野を吹き渡る春風のようなシロモノで、前髪をソツと揺らすのがせいぜいであろう。</u></p> <p><u>吹き渡る春風→屏風の威力</u></p> <p>年老いた赤玉先生が使えば、強力な扇でも威力が期待できない、ということと前述の「片面で扇げば大風を起こし、もう片面で扇げば雷雨を起こす」という天下無敵の扇である。」との比較で落差、ズレを生み出しより赤玉先生の劣勢を強く伝えている。</p>
	<p><u>その天狗笑いは不吉な黒雲のようにひとかたまりになって、吹き渡る風によって飛んでいく。</u></p> <p><u>不吉な黒雲→天狗の笑い声</u></p> <p>不穏な感じ、不安にさせるという点において「近接性」に基づく換喩である。</p>	
	<p><u>ダイレクトメールでも受け取ったかのような冷ややかな顔をしていた。(二代目の表情)</u></p> <p><u>ダイレクトメールでも受け取った→冷ややかな顔</u></p> <p>嫌悪を示すという点において「近接性」に基づく換喩である。</p> <p>これが「苦虫を潰したかのような」などの表現であった場合、蔑む、冷ややかな二代目の様子や表情を表すことができるが、「ダイレクトメールでも受け取ったかのような」という、読者の生活認識と重なるような換喩を用いることでよりその冷ややかな様子をイメージしやすくしている。</p>	

	<p>やがて暗い夜空から万年筆のインクが滴るようにして、黒ずくめの二代目が舞い降りてきた。</p> <p><u>万年筆のインク→黒ずくめの二代目</u></p> <p>ゆっくり高いところから落ちてくる様子、という点において「近接性」に基づく換喩である。</p>	
	<p>みるみるうちに我が四つ足はバルテノン神殿のごとく太くなり、</p> <p><u>バルテノン神殿→四つ足</u></p> <p>太さ、たくましきという点において「類似性」に基づく隠喩である。</p> <p>これが「大木のごとく太くなり」などの表現であった場合、そのたくましきや太さについては表現できるが、その堅固さなどについては大木よりも「バルテノン神殿のごとく」のほうがイメージが湧きやすい。</p>	
	<p>時間が水飴のようにとろとろと流れているかのような。</p> <p><u>水飴→時間の流れ</u></p> <p>ゆっくり流れるという点において「近接性」に基づく換喩である。</p> <p>これが「砂が流れるように」などの表現であった場合、時間の流れを表現することはできるが、そのゆったりとした流れについてイメージすることは難しい。</p>	
	<p>そこは巨人の足跡のようなかたちをした草原で、～</p> <p><u>巨人の足跡→草原の形</u></p> <p>とても大きいという点で「類似性」に基づく隠喩である。</p> <p>これが「大きく拓けた草原」であった場合、広いということは表現できるが、その計り知れないほどの大きさについてまでは表すことは難しい。</p>	
『青山万華鏡』	<p>姉の足取りは、まるで上品な猫のように気まぐれである。</p> <p><u>上品な猫→姉の足取り</u></p> <p>気まぐれ、予測不能な行動に振り回されるという点において、「近接性」に基づく換喩である。</p>	<p>そのビルはまるで中世の小さな城のようだ彼女が気に入っていた。</p> <p><u>中世の小さな城→ビル</u></p> <p>城とビルは結びつきにくく、ズレを感じさせる。ここでは小学生の「私」の、子どもらしい視点から捉えた比喩が行われており、「私」の純粋さが感じられる。</p>
	<p>赤い浴衣が鱗のようにヒラヒラした。(女の子達の浴衣)</p> <p><u>鱗→赤い浴衣</u></p> <p>ヒラヒラ揺れる、という点に加え、ここでの鱗は金魚の鱗を指す、という点から「類似性」に基づく隠喩である。</p>	<p>まるで妖怪のような赤くてぶくぶくとした魚が浮かんでいた。(四階の廊下にいた金魚)</p> <p><u>妖怪→魚(金魚)</u></p> <p>妖怪という喩詞が魚という被喩詞と結びつかないためズレ、オーバーさを感じさせる。四階の廊下という場面とそこにいた異様な魚の様子が描写され、妖怪という言葉が「私」の子どもらしい純粋さを感じさせる。</p> <p>これが「デメキン」や「鯉」のような、という表現であった場合、その赤くてぶくぶくした様子は表現できるが、「私」の子どもらしい視点から捉えた異質な金魚をイメージすることは難しい。</p>

		<p><u>クリスマスツリーの飾り玉のように輝く林檎館を見つめていた。(私視点の林檎館)</u></p> <p><u>クリスマスツリーの飾り玉→林檎館</u></p> <p>どちらの言葉も結びつきにくい、ズレを感じさせる。「私」の視点から見た林檎館の人工的な光沢が描写され子どもらしい「私」の様子を面白く伝えている。</p> <p>これが「電飾のように」だった場合、きれいな林檎館の表面を表現できるが、子どもの無邪気な視点から捉えられた林檎館をイメージすることは難しい。</p>
『四畳半王国見聞録』	<p><u>大学紛争時代に建造されたという冷たく暗いたたずまいは、旧日本軍の要塞を想起せしめる。</u></p> <p><u>旧日本軍の要塞→大学の寮</u></p> <p>巨大さ、冷たい、荘厳な、暗いという点において「近接性」に基づく隠喩である。</p>	<p><u>余は開拓者たらんと意気込み、乙女の柔肌のようにやわらかすぎる古畳を、我と我が身を打ちつけて押し固め、ダビデ像の胸板なみに固い大地へと鍛え上げた。</u></p> <p><u>乙女の柔肌のように→古畳のやわらかさ</u></p> <p>柔らかさという点では「類似性」に基づく隠喩であるが、「乙女の柔肌」と「古畳」というそれぞれの言葉は結びつきにくくズレが生じている。もし「古畳」のみであった場合、老朽化による柔らかさを表現することはできない。</p> <p><u>ダビデ像の胸板のように→畳の固さ</u></p> <p>固さ、という点において「類似性」に基づく隠喩であるが、「畳の固さ」と「ダビデ像の胸板」という言葉は結びつきにくくズレが生じている。</p>
	<p><u>その深夜の咆哮は、野犬の遠吠えのようなものであろうか。</u></p> <p><u>野犬の遠吠え→住人らの咆哮</u></p> <p>吠える勢い、響きという点において「類似性」に基づく隠喩である。</p>	<p><u>したがって床を征服するのは、関ヶ原の合戦中に横から乗り込んで関ヶ原を征服することに等しい。</u></p> <p><u>関ヶ原を征服する→一床を征服する</u></p> <p>征服する、占領するという点では「近接性」に基づく隠喩であるが、「自身の四畳半の生活」と「関ヶ原の戦い」を結びつけるのはオーバーさを感じられ言葉のズレを感じさせる。</p>
	<p><u>その謎めいた鉄管が伝えるのは、やさしい婦人の歌声ではなく、つねに四畳半にひそむ獅子たちの、やむにやまれぬ咆哮なのである。</u></p> <p><u>獅子たちの、やむにやまれぬ咆哮→住人らの咆哮</u></p> <p>吠える声の響き、力強さという点において「類似性」に基づく隠喩である。</p>	<p><u>その御方はただ黙然と座し、はらわたに火薬を詰め込んだようなふくれっ面をして、眼下を睥睨しておられるのであろうか。</u></p> <p><u>火薬を詰め込んだような→ふくれっ面</u></p> <p>膨れている、という点では「類似性」に基づく隠喩であるが人体に火薬を詰め込むという状況は非現実的でありオーバーさを感じさせる。</p>

まず、語と対象が結びついている例としては、

彼女は「みゅーず」の前で、こっそり所存のほぞを固めるように二足歩行
ロボットめいた足踏みを見せてから、むんと胸をはって路地を折れた。

二足歩行ロボット→彼女の足踏み

『夜は短し歩けよ乙女』

上記の文は関節が伸びたような、たどたどしい様子を喩えており、「類似性」に基づく隠喩である。慣れていない、たどたどしい様子を「二足歩行ロボット」によって表している。また、

それでも来信を心待ちにしている赤玉先生は僅かな文字列を舐めるように
丹念に読んで唐櫃におさめ、正倉院御物のように大切にしていた。

正倉院御物→手紙

『有頂天家族 二代目の帰朝』

上記の文では、価値がある、大切にしているという点において「近接性」に基づく換喩の表現が見られる。

これが「宝物のように」という表現であった場合、その大切にしている様子は表現できるが、「正倉院宝物のように」という表現によって、その普遍性や何よりも大切にしている赤玉先生の様子、弁天からの手紙を心待ちにしている様子が表されている。

一方、喩詞と被喩詞の間に「ズレ」が生じていると感じられる表現として例えば、

あたかも大正時代の十四の乙女のように(恥じらう我々)

大正時代の十四の乙女→我々

『四畳半神話大系』

この「大正時代の十四の乙女」という喩詞は、本文における尊大と稚戯性に溢れるキャラクターとして描かれる「私」や小津という被喩詞とは結びつきにくい。恥じらいという点においては「近接性」に基づく換喩である。ただ、喩詞と被喩詞の間にズレがあり、ユーモアやオーバーさを感じる。また、

他人の不幸をおかずにして飯を三杯喰う彼にとって、ありとあらゆる阿呆な
感情に揉まれて他人がみっともなく右往左往するのを眺めることこそ、無上
の楽しみであり生き甲斐であった。

他人の不幸→おかず

『四畳半神話大系』

上記の文で、「他人の不幸」と「おかず」という言葉が性質上結びつかない。「おかず」は本来「今日のおかずは○にしよう。」などプラスイメージを持たれることが多いが、「おかず」となる対象が「他人の不幸」というマイナスイメージであるため、ズレが生まれており、小津の性格の悪さが強められている。この表現が「他人の不幸を喜ぶ」などであった場合、小津の「私」から見た他者よりも顕著な性格の悪さを表現することは難しい。

第二項 形容表現について

次に形容表現について見ていく。そもそも形容とは、

- ①物事の姿・性質・ありさまなどを言い表すこと。また、他のものにたとえて表現すること。
- ②物事のかたち・ありさま。形状。
- ③人のすがたかたち。容姿。容貌。

[形容(けいよう)の意味-goo 国語辞書]

と定義されている。森見登美彦作品においては、いわゆる「普通の」形容表現も見られる一方で、尊大な主人公である「私」が自分自身を周囲の人間と区別したり、周囲の人間の性格や振る舞いを皮肉っぽく表現したりする際には、語と語の結びつきが見出しにくいオーバーな形容表現が使われている場合もある。

以下は各作品で見られる形容表現をまとめた表である。

作品	オーバーさを感じさせない形容	オーバーさを感じさせる形容
『太陽の塔』	<p>あたりを覆い始めた夕闇の中に燦然と輝く(電飾)</p> <p>夜の暗闇の中に電飾が灯っている様子を表現している</p> <p>夜になり街に建物や電飾の光が灯りはじめていることを表現している。</p>	<p>松明をふりかざし、「女子大生はいねがー」と叫びながら、他大学まで女子大生を狩りに行くと一般に言われている恐ろしい(京大生)</p> <p>松明などのワードからなまはげが想起される。しかし大学生となまはげとは結びつきにくい。そのイメージのズレが本作における京大生の女性に対し必死な様子を、おもしろおかしく伝えている。</p>
	<p>しかし、ここで考えねばならないのは、彼女の知り合いというからには彼も法学部である可能性が高く、いかにあそこには司法試験の魔宮に迷い込んで半ば廃人と化している人間がうごごしているとは言え、素人の私を言い負かすぐらいの能力は具えているかもしれないということである。</p> <p>廃人という言葉がややオーバーさを感じさせつつも、合格が難しい司法試験を考慮すれば大きなズレは感じられない。</p>	<p>自分の周囲に張り巡らされた完全無欠のホモソーシャルな世界で満足していた。(人間関係)</p> <p>ここでは「私」の男性だけの狭い人間関係を表しているが、「張り巡らされた」という表現により、イメージの実体化が起きる。そのズレとともに「完全無欠」というオーバーな形容によりその閉塞性が強調される。</p>
		<p>嫌悪すべき相思相愛のめろめろの(ラブストーリー)</p> <p>男女の交際をよく思わない「私」にとってラブストーリーは目に余るものであるが、「嫌悪すべき」という、ラブストーリーとは結びつかないような形容表現をすることで、ズレが生まれ、より「私」の強い姿勢が強調される。</p>
		<p>私はもっと評価される時代に生まれるべきだった。彼らは間違っていて、私こそが正しい時代。そんな時代に生まれていれば、向かうところ敵なし、アツという間に人心を掌握し、酒池肉林で自由自在、銀行預金は見る間に膨れ上がり、やがてはゴルディオスの結び目を一刀両断にして、アレキサンドロス大王にも不可能だった世界征服への梯子を駆け上がったというのに……。</p> <p>自分の現在の満足いかない状況を、周囲の人間の責任にし現実から逃避し自尊心を保とうとする「私」が行った自分に対する形容表現である。「私」の自尊心の高さが読み取れる。</p>
		<p>そのどれもが緻密な観察と奔放な思考、および華麗な文章で記されており、文学的価値も高い。</p> <p>「私」の主観的な評価であり水尾さんの研究を行う自身の行為を正当化しようとする様子がオーバーさを感じさせ、「私」は尊大で一人よがりの考え方をする人物、という印象が感じられる。</p>
		<p>私の内部にある何かおかしげなものを引きずり出し、分析して粉碎しようとする(植村嬢)の思惑</p> <p>「粉碎」という言葉が実体のあるものと結びつくものであるが、この場合私の思惑などに結びつくため、ズレが生まれている。オーバーな感じが「私」の植村嬢に対する恐れを強く、それでいてユーモアに伝えている。</p> <p>植村の勘の良さ、恐ろしさを「引きずり出す」「粉碎する」という</p>

		表現で表している。これが「引き出す」「読み取る」という表現ではイメージが異なり、植村の勘の良さは表せるが恐ろしきは表すことが難しい。
		来るものは何者も拒まずに受け容れる二十四時間開放主義を誇る (我が家) 水尾さんのオートロックのマンションとの比較としてこの形容が使われている。オーバーな形容表現である。 セキュリティの甘さを「二十四時間開放主義」という言葉によって表している。もしこの表現がなかった場合、「鍵の施錠」という要素がイメージしにくく、オートロックとの比較が難しくなる。
『夜は短し歩けよ乙女』		アツアツぶりは、たちまち参加者たちを黒焦げにした。(新部新編の幸せな様子) 新婚の二人の幸せそうな様子、アツアツぶりは実際に人々を焼き、黒焦げにできるわけではないが、オーバーな書き方をするのでその場の暖かで幸せな様子が伝えられている。
		彼女と私を結ぶ赤い糸が路上に落ちていないかどうか、鶴の目鷹の目で探していた。 実際に運命の赤い糸は見えず路上にも落ちていないが、必死に彼女と交流しようとする「私」の様子をオーバーな表現で伝えていることで、「私」の必死さが感じられる。
		御財布への信頼に一抹の翳り(私のような人間) 財布の残額は本来自分自身で管理することができるが、「信頼」という言葉や「一抹の翳りがある」という表現を行うことで立場が逆転しているように感じられ、彼女が財布によってコントロールされているところや安くお酒を飲めるバーを見つけた時の安堵感が、オーバーな表現とともに自嘲する彼女の様子を面白く伝えられている。
『恋文の技術』	むしろ本質をつねに見逃すうえに見逃したことも気づかない薄ぼんやり屋さん(小松崎) 「私」の視点から小松崎に対する形容である。	脳みその谷間にたち込めた霧を晴らすべきだ。(小松崎) 霧はここでは引っかけ、迷いなどの象徴として使われているが、霧と脳内が結びつきを感じにくい。 この表現が「雑念を振り払う」などであった場合、小松崎の暗中模索している状態が表すことが難しい。
	イベントに充ち満ちた京都の地の利も生かせない男(三枝さんをデートに誘えない小松崎) 京都という魅力的な場所にもかかわらず、三枝さんをデートに誘えない小心者の小松崎に対する形容である。	俺は自分で播いた種は自分で刈り取る正義の人(私) 自業自得、自分で原因を作ることを表す表現として「自分で播いた種」があるが、「自分で刈り取る」という動作が加わることでより種の具体的なイメージが浮かび上がり自尊的な「私」という人物をユーモアを持って伝えられている。 この表現が「私は責任感のある人」であった場合、役割だけではなく自分で作った原因や問題も解決するという、「私」の自負の強さ

		を表すことができない。
	能登の空はなぜこんなに灰色で、頭がつかえそうなほど低いのだろうか。 孤独に能登の地で研究を進める「私」が行った空の形容である。	
『四畳半神話大系』	これだけの妖気を無料で垂れ流している人物の占いが当たらないわかない。 夜中に会った女性の占い師が漂わせる妖しい雰囲気とそこからうかがえる占い師の熟練度に対する形容である。	光源氏の赤子時代もかくやと思われる愛らしさ、邪念のかけらもないその笑顔は郷里の山野を愛の光で満たしたと言われている。(私の生後間もない頃) 私の愛らしさについて表現しているが、「光源氏の赤子時代もかくや」などオーバーさがあり、「私」自身が自画自賛している点からも尊大な「私」の人物像が読み取れる。
	入学当初はそれなりに薔薇色であった私の脳味噌が暖色を失い、みるみる青紫色に変わった経緯については多くを語るまい。 「脳味噌」という言葉に色という概念を加え、可視化することで私の考えの変化をわかりやすく伝えている。また「暖色」と「青紫色」という対極の印象を持つ色を並べることでよりその変化を強調している。	私は死神のいでたちをした黒キュービッドであり、恋の矢のかわりにマサカリを振るって、赤外線センサーのように張り巡らされた運命の赤い糸を切って切って切りまくった。(私のこれまでの振る舞い) 「死神のいでたちをした黒キュービッド」は「私」(作者)独特の表現である。「死神」と「キュービッド」という性質上対極の言葉を並べることでズレが生まれている。また「赤外線センサー」という表現により、「運命の赤い糸」が実体として浮かび上がりその数の多さが強調されている。その強調により男女の仲を良しとしない「私」のこれまでの生き方が印象づけられる。
		ほころびた赤い糸の切れる音を耳にするたびに言いたいぬ愉悅を感じる極悪人へと転落した。(私) 「言いたいぬ愉悅を感じる極悪人」という表現にオーバーさを感じさせる。またこの評価を「私」自身が行っているため、「私」の大学入学前と入学後の考えの変化をより強く感じさせる。
		そして「みんなで楽しく映画作ってるよ」という甘言に私らしくもなく感わされ、友だち百人作るべく、その日のうちに入会を決めてしまったのは、来るべき薔薇色の未来への期待に 我を忘れていたとしか言いようがない。(入学当初の私) 「友だち百人作る」というフレーズは馴染みのある歌詞の一部であるが、文脈の中で使われると新鮮さがありオーバーさを感じさせる。「薔薇色の未来」についても「私」自身が語ることによって自虐的な面白さがある。
		繊細な私だけが見ることができる地獄からの使者かと思った。(小津) 「地獄からの使者」という表現がオーバーであり、小津という人物の存在の異質さを表現している。また「繊細な私だけが」という形容がその異質さを強めている。 この表現が「私にしか見えない妖精」などであった場合、小津への

		皮肉や小津の異質な様子を表すことは難しい。
		<u>七転八倒の孤独な心理的暗闘を演じている私</u> 「七転八倒の孤独な心理的暗闘」が「私」(作者)独特の表現である。「心理的暗闘」という表現にオーバーさを感じさせ、「私」自身によって語られることでより苦悩や苦しみを感じさせる。
		<u>彼には節足動物の死骸を塗り込んだケーキでも送り届けることにして、(城ヶ崎先輩に対して)</u> 非現実的であり、ケーキに対する形容である。「私」の城ヶ崎先輩に対する憎しみの強さが強調される。
		<u>ホモサピエンスの面汚し(小津)</u> オーバーな形容であり、「私」の小津に対するよくない印象が皮肉を感じさせながら、ユーモアをもって伝えられている。
		<u>ドス黒い糸でボンレスハムのようにぐるぐる巻きにされて、暗い水底に沈んで行く男二匹の恐るべき幻影が脳裏に浮かび、私は戦慄した。(私と小津)</u> 「ドス黒い」以降の表現が二人で同じ暗い運命を辿る、心申していることの表現であると感じさせるが、非現実的であるためオーバーな印象を与える。自虐的でユーモアを感じさせる。
		<u>すでにこちこちになって虚空に屹立している(大学三年生時点での私)</u> 「私」の人格に関する形容であるが、「こちこちになって虚空に屹立している」という表現が実体を思い浮かばせ、ややオーバーさを感じさせながら私の歪んだ性格を自虐的に伝え、ユーモアを感じさせる。
『有頂天家族 二代目の帰朝』	<u>やがて暗い夜空から万年筆のインクが滴るようになって、黒ずくめの二代目が舞い降りてきた。</u> 二代目が空からゆっくり降りてくる様子に対する形容である。	<u>後ろ指を指されるぐらいならば、高野豆腐に激突して死んだほうがマシという人物である。(赤玉先生)</u> 「高野豆腐に激突して死ぬ」というのは、ここでは惨めな死に方の例として引き合いに出されている。オーバーさを感じるが、赤玉先生の周りの狸からの評判や自身のメンツを守ろうとする姿勢が伝えられている。
『宵山万華鏡』	<u>たがいを紐で結わえて引っぱりあうかのように、彼女たちは絶えず二人でくるくる動き回っていた。</u> 姉妹のはぐれないように祭りの中を歩いて行く様子。	
	<u>先生が機嫌が悪くすると、その怒りの中枢から延びた鉄の糸が教室の隅々まで張り巡らされているようで、息が詰まった。</u> 緊張が張り詰めている教室の雰囲気「鉄の糸」という表現で可視化することでよりイメージしやすくなり、より緊張感を伝えている。	
	<u>その足取りは踊るように軽やかであった。(姉)</u>	

	祭りの最中楽しそうで、舞い上がっている姉の様子に対する形容である。	
	ひらひらと舞うように路地を抜けていく彼女たちは、まるで薄暗い水路を泳ぐ金魚の群れのようにであった(女の子達) 後の、女の子たちが金魚へと変わっていく描写へとつながる。	
	暗い路地の中で宙に浮かんだ女の子たちは、漂うようにして浮かび上がっていく。(女の子達) これが「舞うようにして」だった場合、その後の金魚のように浮かび上がっていった少女らの描写と結びつかない。	
『四畳半王国見聞録』		それは外界の神羅万象に引けをとらぬ、豊穣で深遠な素晴らしい世界である。 「私」自身が住む四畳半について、心地よさを作り上げてきた独自の四畳半世界観を外界とも比較した「私」のオーバーな表現が読み取れ、「私」が自分の住まいである四畳半を非常に気に入っている様子や、その閉塞性が際立って感じられる。
		それは余が豊穣なる四畳半王国を建国した、真に偉大なる四畳半主義者であるからにほかならない。 「私」が自身の四畳半を王国と呼び「真に偉大なる四畳半主義者」と形容している点でオーバーさを感じさせ、「私」の尊大である人物像が読み取れる。
		それらは実にさまざまな形を取るが、包括して「熱力学第二法則」と呼ばれている。 部屋に散乱しているごみやモノを指すが、いずれの対象にしてもオーバーさを感じさせ、部屋の散らかった様子が強調して伝えられている。

まず、オーバーさを感じない形容表現について見ていく。

たがいを紐で結わえて引っ張りあうかのように、彼女たちは絶えず二人でぐるぐる動き回っていた。

『宵山万華鏡』

上記の形容表現は、祭りの混雑の中で姉妹が離れ離れにならないようにするため手をつないで移動する様子を、「紐で結わえて引っ張りあうかのように」という形容で表現している。「結びつく」「離れない」という点でも紐と姉妹は性質が似ているためオーバーさを感じさせない。

その一方で、

生後間もない頃の私は純粹無垢の権化であり、光源氏の赤子時代もかくやと思われる愛らしさ、邪念のかけらもないその笑顔は郷里の山野を愛の光で満たしたと言われている。

『四畳半神話大系』

という上記の表現では、生後間もない「私」の幼い当時の様子を「私」自身が形容し、語っている。この饒舌な形容は後に続く文では、「それが今はどうであろう。鏡を眺めるたびに怒りに駆られる。」とあり、過去と現在を対比し異性からの孤立、学問の放棄、肉体の弱体化という怠惰で情けない自分の現在の姿を嘆いている。つまり過去と現在の対比を生み出すためにこの饒舌な形容が使われていると言える。

しかし、この形容が例えば「可愛い顔をした当時の私」であった場合どのように印象が違って来るだろう。確かに、自分自身を高め可愛いと形容している点では同じである。しかし、「純粹無垢の権化」や「光源氏の赤子時代もかくやと思われる愛らしさ」などの形容と比較すると、自分自身を高める、「私」の尊大さという点においては物足りなさを感じさせる。つまり森見富彦作品に登場する形容表現の特徴として、オーバーで饒舌な形容表現があるといえるだろう。次に、他の登場人物に対する形容表現についても見てみる。

狸ごときに「二代目が怖くて逃げた」と後ろ指を指されるぐらいならば、高野豆腐に激突して死んだほうがマシという人物である。

『有頂天家族 二代目の帰朝』

繊細な私だけが見ることができる地獄からの使者かと思った。

『四畳半神話大系』

『有頂天家族 二代目の帰朝』から抜粋した文を見てみると、元々天狗で子分の狸たちに対して高いプライドを持っている赤玉先生のキャラクター性を、狸の矢三郎による形容によって表現している。「高野豆腐に激突して」死ぬ、という状況はそもそも現実味がなく誰かが死ぬとは言い難いが、この場合は無様で情けない状況の象徴としてプライドの高く周囲の目を気にする赤玉先生の形容に使われている。また、『四畳半神話大系』では「私」が大学生活を狂わされたという小津に対する形容であるが、この文ではまず「繊細な私だけが見ることができる」という、「私」自

身を高める表現がされ尊大な「私」が表されておりその後続く「地獄からの使者かと思った。」という小津への皮肉を込めた形容によって、「私」と小津の対比がなされている。これらの形容から、人物に対してオーバーさを感じさせる表現の特徴が読み取れる。

なぜこのような表現の特徴が森見登美彦作品において見られるのだろうか。以下に『文藝別冊 総特集森見登美彦 作家は机上で冒険する!』の、佐々木敦氏のインタビューより抜粋する。

アニメでイメージができていの方も多いのでそこはまあそれもアリだとは思っています。ただ、僕自身はキャラクターを言葉で考えているから、見た目のイメージと違ってどうでもいいんですよね。どっちみち「かわいい女の子」って書いたところでかわいさなんて人それぞれだし伝わるわけがない(笑) 主人公にどう見えているか、主人公がどうかかわいいと思っているのかが大事なのであって、それは結局「言葉」です。小説の場合は客観的に見て美人であろうが何だろうがどうでもいいわけじゃないですか。主人公がその対象をどう表現するか、どんな言葉をかけるか・・・やっぱり言葉に回収されるところで、魅力的なキャラクターになるように書いている。そこはアニメとはそもそも根本的には発想が違いますよね。

『文藝別冊 総特集森見登美彦 作家は机上で冒険する!』

森見は語り手などの客観的な語りによって登場人物らを定義し型にはめ込むのではなく、その世界で困難に立ち向かったり、新鮮な世界に感動をしたり、恋に落ちたりする生き活きとした登場人物らの視点を中心に置き人物造形、物語世界の構築を行っている。そういった視点があるからこそ、読者は世界が平行して動き複雑に絡んでいくことになっても登場人物らを見失うことなく人物同士の関係性を踏まえたうえで、展開を捉えていくことができるのでないだろうか。オーバーで饒舌な比喩・形容表現は人物同士の特別な関係性を示し、「魅力的なキャラクター」を浮かび上がらせるだけでなく、人物らが出会うことによって大きく展開していく森見登美彦作品の物語世界において非常に重要な働きをしているといえる。

第三項 まとめ

以上の観点を踏まえた上で、各作品の冒頭部における比喩、形容表現の分類を行い、比喩については、「語(喩詞)と対象(被喩詞)が結びついているもの」「ズレが生じているもの」、形容表現は「語(形容)が対象(被形容)にオーバーさを感じさせるもの」「語(形容)と対象(被形容)にオーバーさを感じさせないもの」という項目を設けその数をまとめたものが次の表である。なお、5つ以上数が見られたものは色付けを行っている。

作品名	結びついている (比喩)	ズレが生じてい る(比喩)	オーバーさを感じ させる(形容)	オーバーさを感じ させない(形容)
『太陽の塔』	7	2	7	1
『夜は短し歩けよ乙女』	7	4	3	0
『恋文の技術』	2	5	2	3
『四畳半神話大系』	3	5	10	2
『有頂天家族 二代目の帰朝』	8	2	1	1
『宵山万華鏡』	2	3	0	5
『四畳半王国見聞録』	2	2	3	0

各作品冒頭部において比喩、形容表現それぞれで喩詞・被喩詞に言葉の性質上のズレが生じていたり、オーバーさを感じさせる形容が多く見られた。特に『四畳半神話大系』では主人公である「私」は大学の悪友である「小津」に対する、オーバーで皮肉めいた形容が多く見られたり、また「私」自身の尊大で世間から離れ妄想ばかりを繰り返す性格が要因となって人物や情景に対する比喩が行われている。このように比喩、形容表現を行う登場人物の性格やそれらの表現を誘う周囲の状況によってズレやオーバーさを感じさせる特徴的な表現が生まれることが分かる。

そして、森見登美彦作品においては、登場人物の視点から捉えられた世界を登場人物自身が語ることによって物語が展開されていく。つまり、第三者の語りではなく、読者は登場人物自身の語る言葉や起こす行動を把握し、それぞれのキャラクターについて理解を行いながら読み進めていく必要がある。

自分の見方・考え方と社会とのズレ、主観と客観とのズレが生まれており、その点が森見登美彦作品において登場する人物の特徴でもあり、面白さを生み出している。

第三章 表現特性

第一節 言葉の提示の仕方

第一項 李白-『夜は短し歩けよ乙女』

森見作品においては何度も同じ言葉が登場するが、その提示の仕方によって読者とその人物や事象に対して興味を抱かせ物語世界に引き込もうとする表現の特性があると考えた。そこで『夜は短し歩けよ乙女』冒頭部で登場する李白という人物と詭弁踊りという踊りがどのような提示の順番で、どのような効果が生み出されているかを考える。

以下は「私」と「彼女」が街の人々の話す李白という人物の噂話を聞き、実際に李白と会うまでの李白の提示のされ方を示す文である。

A.

「李白さんというヘンテコなジジイがおってね。近頃はあまり巡り合わないけれども、昔、その人にくっついて飯食ったり酒を飲んだりしていたことがあった。李白というのは渾名だが、とにかく風変わりなお人だ。昼日中は物凄い吝嗇家だが、夜になるとお大尽になる。おかげで私もしばらく喰えた。」

B.

怒りが抑えがなくなったのか、彼はしきりに李白という老人を罵った。李白爺から借金の返済を迫られているというのである。「あの馬骨野郎」と罵倒してから、誰かに聞かれてはいないかと背後の様子をうかがっている。

C.

「その心意気やよし。君、李白さんと飲み比べしたまえ。そしたら偽電気ブランを好きなだけ飲めるぞ」社長さんは言います。「俺なら君に賭ける」
今宵は誰も李白さんを見ていません。自家用車に籠もって古書を舐めるように読んでいる。あるいは道行く酔っぱらいのズボンを奪って遊んでいる、それが大方の見解です。

D.

噂によると、李白爺へ一世一代の大勝負を挑もうとする怪人物がこの界限を歩き回っているとのこと。その人物は全長二メートルに及ぶ巨体で、ぼろぼろの浴衣を着た「眠れる獅子」と呼ばれる破戒坊主であり、口から数知れぬ鯉のぼりを吐き出すという傑物、はるばる奥州から李白爺を打ち負かすために上洛したというのである。傑物というよりもむしろ妖怪ではないか。

E.

暗くて狭い先斗町の南から、背の高い電車のようなものが、燦然と光を放ちながらこちらへ向かって来るのです。それは叡山電車を積み重ねたような三階建の風変わりな乗り物で、屋上には竹藪が繁っているのが見えました。
車体の角にはあちこちに洋燈が吊り下げられて、深紅に塗られた車体をきらきらと輝しています。色とりどりの吹き流しや、小さな鯉のぼり、銭湯の大きな暖簾などが、車体のわきで万国旗のようになびいているのも見えます。
幾つもある車窓の中には、居心地の良い居間のように明かりが満ちて、小さくも豪華なシャンデリアが電車の進行に合わせて揺れています。一階の窓からは、ぎっ

しりと本が詰め込まれた書棚や、天井から吊られた浮世絵が見えました。

F.

路上の人々が「李白さんだ」「李白さんが来た」と呟くと、千歳屋の欄干から身を乗り出していた東堂さんは「何、李白ッ」と叫んで首を伸ばしました。

G.

それら風変わりなコレクションを照らすシャンデリアの真下、福々しい顔をしたお爺さんが、マシュマロのように柔らかそうな一人掛けソファに沈み込んでいます。

彼はにこにこしながら水煙管を吸い、ぽこぽこ音を立てました。

「皆さん御機嫌よう」と李白さんは煙管から口を離し、朗らかな声で言いました。

「私と勝負したいというのは、そこのお嬢さんか」

A から D の文の噂の段階では、李白は酒飲み、風変わりで酔っぱらいのズボンを奪うような自由奔放な人物として描かれている。東堂が李白という人物に対して強がりながらも、誰かに聞かれていないかと警戒し恐れている様子も伺える。また「私」が噂で耳にした、李白との勝負に挑もうとする人物像も屈強な存在として勝手なイメージが先行して出来上がっており、そのような人物が挑もうとしている、あるいは匹敵するかもしれないという李白の存在感が高まっていく。確かにそのイメージ通り、三階建ての豪華絢爛な電車という、他の登場人物らとは一線を画す登場であったが、その李白と初めて出会うシーンでは、

福々しい顔をしたお爺さんが、マシュマロのように柔らかそうな一人掛けソファに沈み込んでいます。彼はにこにこしながら水煙管を吸い、ぽこぽこ音を立てました。

『夜は短し歩けよ乙女』

のように、柔和な、親しみやすい雰囲気漂わせる人物として李白は登場した。人々の噂で出来上がったイメージとは全く異なるものである。そのイメージの違いを生み出しているのが、[その人物は全長二メートルに及ぶ巨体で、ぼろぼろの浴衣を着た「眠れる獅子」と呼ばれる破戒坊主であり、]と「福々しい顔をしたお爺さん」「マシュマロのように柔らかそうな一人掛けソファに沈み込んでいます。」のように、それぞれの形容、比喩に使われる言葉の性質上のズレであり、読者は、妄想や噂話によって振り回される登場人物らの様子や実際に姿を現した際の李白の噂と現実のギャップについて面白さを見出すことができるのである。

第二項 詭弁踊り－『夜は短し歩けよ乙女』

次に挙げるのは『夜は短し歩けよ乙女』冒頭に登場する詭弁踊りに関する文である。

A.

「それでわあ、そろそろお、高坂先輩を励ますう、詭弁踊りをう」
幹事らしい女性が立ち上がって言いました。

B.

「さあ詭弁踊りを踊って、すっぱり思い切って外国へ行ってくださいよ」

C.

「それにしてもどこの阿呆だ、こんな踊りを考えたのは。末代までの恥だ。」

D.

喜びの音が響く中、高坂先輩は後輩たちの間をもみくちゃにされながら進み、
やがて人々が両手を上げて頭上で手のひらを合わせ、腰をくねらせながら
座敷内を練り歩きはじめました。それが詭弁踊りです。

E.

そこからふたたび宴の席は朗らかになって、やがて風船のように上機嫌に
なった社長さんと内田さんがそれぞれの両手を上げて手のひらを合わせ、
くねくねと踊りました。それは紛うかたなき「詭弁踊り」です。

F.

すっかり意気投合した我々は詭弁踊りを踊りながらその酒場を後にして、
夜討ちをかけるように先斗町を渡り歩きました。
その方々こそ、かつての詭弁論部員であり、詭弁踊りを考案した人々でした。
のらりくらりと詭弁を弄んで他人を煙に巻いていた懐かしき青春の日々、彼
らに投げつけられた数々の罵詈雑言の中に「このウナギ野郎」という
一言があり、気に入った彼らは「我ら鰻の如くぬらぬらと詭弁を弄せ
ざるべからず」と満天下に宣言しました。宴会のたびに鰻をまねた詭弁
踊りを踊ることを部訓へ織り込んで嫌がる後輩に無理強いし、それが
三十年以上の時をこえて脈々と受けつがれ、現役部員に「それにしても
どこの阿呆だ、こんな踊りを考えたのは」と言わしめることになったの
です。
当時、外国へ留学することになった同志を飛行場へ見送りに出かけ、詭弁
踊りで送り出したこともあったそうです。

G.

地下牢めいた酒場の隅でアヤシゲな詭弁踊りを踊っていたので、間違えよ
うはずありません。三十年の時をへだてて出会った先輩と後輩は互いに
感無量、詭弁踊りを踊り狂ってから意気投合し、肩を組んでデタラメな
「詭弁の歌」を歌いました。

Bの文を見ると、英国へ旅立つ高坂先輩の送別会という状況であり、幹事の女性の呼びかけから、その集団が共通し

て認識しているものであるということが分かる。ただ、詭弁踊りという「何(名前)が」が読者にとって分かりにくいものである。道理に合わないことを強引に正当化しようとする弁論と踊りという言葉の結びつきがこの時点では見出せない。また「どのように(方法)」踊るのかということについても描写がないためこの時点では読み手は詭弁踊りという踊りの具体的な動きができず、理解できない。加えてCの文では人を励ますはずの踊りがその集団に属する人には好ましく思われていないことが分かる。このプラスイメージとマイナスイメージのギャップ、という点においても読み手にサスペンデッド状態が生じている。

このサスペンデッド状態はC以降の文で解消される。D、Eでは「両手を上げ」「手のひらを合わせ」「くねくねと」踊る、という詭弁踊りの独特な振り付けが人々の様子の描写によって明らかになる。つまり読み手は不明であった「どのように(方法)」を獲得するのである。そしてFでは詭弁踊りが三十年前以上に作られ脈々と現在まで引き継がれているものであることが明かされ、その歴史と当時と現在の部員らの踊りに対する認識のズレについても読み手は理解する。

次に詭弁通りを含む文の叙述分析を行う。各文を描写、記述、説明解説、評価に分類し、サスペンデッド状態がどのように解消されていくかを見ていきたい。

Aでは詭弁踊りと一般的事態である「幹事らしい女性が立ち上がって言いました」という文で[解説]である。伝聞の形であるため語り手の判断で判断ではなく一般的判断であることを示している。

Bでは、「すっぱり思い切って」の部分が、高坂先輩にとって詭弁踊りが何らかの関係があることを暗示しており、また送迎会という場で「すっぱり思い切って」踊ることを薦めているところからも「なぜ(目的)」が内包されていることが読み手は伺える。分類としては[記述]であろうか。

Cでは、「それにしてもどこの阿呆だ、こんな踊りを考えたのは、末代までの恥だ。」と[評価]を含んだ文である。「こんな踊り」は詭弁踊りを示すがこの時点で叙述者は詭弁踊りの、「どのように(方法)」「なぜ(目的)」を明らかにしていない。「こんな」は近称であるが読み手にとっては詭弁踊りとの距離が遠い。

Dでは、登場人物らの行動である「人々が両手を上げて頭上で手のひらを合わせ、腰をくねらせながら」「座敷内を練り歩き始めました」の描写である。ただ、その後「それが詭弁踊りです。」という語り手の視点からの語りと登場人物である「私」視点の断定の語りが重なる点に注目したい。冒頭で行ってきた登場人物である「私」が時々の状況を描写する視点に読み手に向けた語り手の視点が入り込んでくるのである。行動の[描写]である。

Eでは登場人物である「そこからふたたび宴の席は朗らかになって、やがて風船のように上機嫌になった社長さんと内田さんがそれぞれの両手を上げて手のひらを合わせ、くねくねと踊りました。」の[描写]である。その後の[それは、紛うかたなき「詭弁踊り」です。]をDの文「それが詭弁踊りです。」と助詞の働き等について比較すると、詭弁通りが強調されていることが分かる。詭弁踊りの具体的な動きについての[描写]の内容はほとんど変わらないが、「私」の詭弁踊りを断定する視点が語り手の視点とより濃く重なるのである。

Fでは「私」を含めた登場人物らの行動である「すっかり意気投合した我々は詭弁踊りを踊りながらその酒場を後にして、夜討ちをかけるように先斗町を渡り歩きました。」の描写である。その後の[のりくらくらりと詭弁を弄んで他人を煙に巻いていた懐かしき青春の日々、彼らに投げつけられた数々の罵詈雑言の中に「このウナギ野郎」という一言があり、気に入った彼らは「我ら鰻の如くぬらぬらと詭弁を弄せざるべからず」と満天下に宣言しました。]という文では、「過去」の出来事を「現在」振り返って叙述している。分類としては[説明解説]である。

以上を図示する。

『夜は短し歩けよ乙女』の冒頭7文における「詭弁通り」の内容分析

本文	対象表現			叙述者表現	
	描写		記述	説明解説	評価
	心情	行動			
「それでわあ、そろそろお、高坂先輩を励ますう、 <u>詭弁踊り</u> をう」 幹事らしい女性が立ち上がって言いました。				A	
「さあ <u>詭弁踊り</u> を踊って、すっぱり思い切って外国へ行ってくださいよ」			B		
「それにしてもどこの阿呆だ、こんな踊りを考えたのは。末代までの恥だ。」				C	
喜びの音が響く中、高坂先輩は後輩たちの間をもみくちゃにされながら進み、やがて人々が両手を上げて頭上で手のひらを合わせ、腰をくねらせながら座敷内を練り歩きはじめました。それが <u>詭弁踊り</u> です。		D			
そこからふたび宴の席は朗らかになって、やがて風船のように上機嫌になった社長さんと内田さんがそれぞれの両手を上げて手のひらを合わせ、くねくねと踊りました。それは紛うかたなき「 <u>詭弁踊り</u> 」です。		E			
すっかり意気投合した我々は <u>詭弁踊り</u> を踊りながらその酒場を後にして、夜討ちをかけるように先斗町を渡り歩きました。 その方々こそ、かつての <u>詭弁論部</u> 員であり、 <u>詭弁踊り</u> を考案した人々でした。 のらりくらりと詭弁を弄んで他人を煙に巻いていた懐かしき青春の日々、彼らに投げつけられた数々の罵詈雑言の中に「このウナギ野郎」		F	F		

<p>という一言があり、気に入った彼らは「我ら鰻の如くぬらぬらと詭弁を弄せざるべからず」と満天下に宣言しました。宴会のたびに鰻をまねた<u>詭弁踊り</u>を踊ることを部訓へ織り込んで嫌がる後輩に無理強いし、それが三十年以上の時をこえて脈々と受けつがれ、現役部員に「それにしてもどこの阿呆だ、こんな踊りを考えたのは」と言わしめることになったのです。</p> <p>当時、外国へ留学することになった同志を飛行場へ見送りに出かけ、<u>詭弁踊り</u>で送り出したこともあったそうです。</p>				
<p>地下牢めいた酒場の隅でアヤシゲな<u>詭弁踊り</u>を踊っていたので、間違えようはずもありません。三十年の時をへだてて出会った先輩と後輩は互いに感無量、<u>詭弁踊り</u>を踊り狂ってから意気投合し、肩を組んでデタラメな「詭弁の歌」を歌いました。</p>			G	
	主体	語り手		語り手
	視点の位置			視点の位置

D、E、Fで詭弁踊りの描写を「私」は語り手の視点を交えながら行った。わざわざ描写する以上叙述者の意図が込められていることが考えられるが、その意図が不明でありかつ何回も登場するが故にサスペンデッド状態が生じているのである。そして、描写の後記述を加え、「何(名前)が」「どのように(方法)」「なぜ」のサスペンデッド状態が解消されるのである。

第二節 表現の変化

第一項 『夜は短し歩けよ乙女』における「私」と彼女

森見作品では特徴的な形容や比喩表現が見られることを述べてきた。使われている形容や比喩表現は、その時々での登場人物らの身の回りの状況や、心理状況によって変化が起きている。『夜は短し歩けよ乙女』に登場する「私」と「彼女」は、お酒を飲み始めてから特徴的な喩詞を使うなど、独特な言葉を用いて形容を行っている。

以下に『夜は短し歩けよ乙女』冒頭部の「私」が行った特徴的な形容、比喩表現を抜粋する。

ページ	本文
P5	まるで招き猫の手のような愛らしさを湛える。
P42	ぼよんぼよんと床が波を打つ。それに合わせて、崖から転落するように胸が悪くなる。
P55	焼きすぎた餅のように膨れていた。
P55	紫色の饅頭のような座布団が並べられていた。
P70	外灯の明かりを受けたそれがキラキラと金粉を散らしたような美しい色をしていると思ったが最後、私は頭に重い一打を受けてひっくり返った。
P71	長く虚しい旅路の果て、ようやく好機は巡ってきた。 夜を司る神と偽電気ブランこそが与えたもう、真善美うち揃った笑みだった。
P72	その豆大福のような拳を見たのを最後に、私は酔いつぶれた。

「私」は、東堂に先斗町のバーに連れて行かれた後「大いに酩酊した」のだが、酒に酔った後「私」は特徴的な形容をするようになった。以下に「私」が行った三つの形容を取り上げる。

A.

「焼きすぎた餅のように膨れていた。」

B.

「紫色の饅頭のような座布団が並べられていた。」

C.

「その豆大福のような拳を見たのを最後に、私は酔いつぶれた。」

『夜は短し歩けよ乙女』

それぞれ順に、酔った「私」の顔、「千歳屋」の座敷にあった座布団、酔いつぶれる前に見た彼女の手を形容したものである。全て異なる対象を形容したものであるが、「餅」「饅頭」「豆大福」は素材や見た目という点で共通性が感じられる。酒を飲み酩酊した「私」の、頭が回らなくなっている様子がこういった形容表現からも読み取ることができる。

お酒が飲めない「私」に対し、「彼女」は普段からバーに通うほどのお酒好きである。夜の街に出て、[かくして私は「月面歩行」にて、無勝手流にお酒を嗜んでいたのですが、カウンターの隅にいた見知らぬ中年の殿方にふいに声をかけられました。]というお酒を飲み始めた描写から、李白との飲み比べを終え、「私は生まれて初めて足がよろけるのが面白く、」「ほろ酔いの自分が面白くて屋上へ出てみたいと思いました。」という彼女の心理描写まで、彼女がお酒に酔っていることを伺わせるような描写や記述は見られない。その一方でお酒を飲み続ける「彼女」は徐々に

特徴的な形容や喩えを行うようになっていく。

以下に、「彼女」が冒頭部で行った特徴的な形容、喩え表現を抜粋する。

ページ	本文
P14	痩せてひろひろしており、長い顔に無精髭がのびて、胡瓜の尻尾へ砂鉄をまぶしたようです。彼が身を寄せてくる際に鋭く鼻をつくのは殿方用香水の香りでしょうが、ありのままの東堂さんが発散する野生的香りもまたその後から猛々しく溢れ出してきて、香水の鮮烈な香りと混じり合って悪夢的な奥深さを醸し出します。
P15	東堂さんはくしゃくしゃと藁半紙を丸めたように笑います。 私は炊飯器よりも面白みにかける無粋者なのです。
P20	私は好奇心でいっぱいになるあまり、木屋町の路上でばちんと弾けそうになりました。
P23	私の手なんぞ何の面白み也没有せん。紅葉饅頭のほうが断然可愛いにちがいないのです。
P29	樋口さんは自転車のわきにしゃがみ込んで、ふにゃふにゃしたお化け昆布のようなものを持ち上げました。
P46	我々の溜まっている酒場の一角が静かになって、沈没する豪華客船のように水底へ沈んでいくような感じがしました。

「彼女」はお酒を飲み始めると想像力豊かな形容や比喩を行う。落ちていたズボンに「お化け昆布」という独特でファンタジー色の強い言葉で喩えていたり、酒場が静寂に包まれていく様子を「沈没する豪華客船」「水底へ沈んでいく」と想像力豊かに形容している。ちなみに「彼女」が冒頭部において初めて行った比喩は、

もちろんラム酒をそのまま一壺、朝の牛乳を飲むように腰に手をあてて飲
み干してもよいのですが、そういうささやかな夢は心の宝石箱にしまっ
ておくのが慎みというもの。

『夜は短し歩けよ乙女』

であり、お酒を飲み始めてからの形容、比喩表現と比較するとお酒を飲み始めてからのほうが、やや想像性を強めた言葉で形容、比喩を行っていることが分かる。初めての夜の街で新鮮に映る景色や人々との出会いに興奮し胸を躍らせる「彼女」の様子や、お酒を飲み俗世から離れた世界にいるような感覚にある「彼女」の心理状況が、こういった形容、比喩表現の経過比較から読み取ることができる。

第二項 『宵山万華鏡』における妹

次の表は、『宵山万華鏡』に登場する妹が、祭りの最中に姉とはぐれ徐々に不思議な世界へと迷い込んでいく冒頭部において、妹が行った周囲の人物や風景に対して行った比喩、形容表現である。

ページ	本文
P26	A.通りかかる人が彼女を一瞥するだけで、相手が自分を狙う人さらいのように思われ、恐ろしさに身体がカッと熱くなった。
P30	B.狭い路地に充ちる祭りの明かりを抜けていく彼女のまわりを、つねに赤い浴衣を着た女の子たちがひらひらと舞うようにして歩いていた。
P30	C.そうやって手をつないでいると、自分の身体まで軽くなっていくようだ。 足取りが軽くなるにつれて頭が痺れてきて、彼女は同じ景色を繰り返し見ていることも気づかなかった。
P31	D.そうやって手をつないでいると、自分の身体まで軽くなっていくようだ。 足取りが軽くなるにつれて頭が痺れてきて、彼女は同じ景色を繰り返し見ていることも気づかなかった。
P34	E.屋上のへりに座って眼下を眺めたら、黒々とした見物客の流れの中に、山鉦がまるで西洋ランプみたいに可愛く見えるかもしれない。 そして屋上世界の彼方をゆっくりと渡っていくのは金魚鉦だ。それはほかのどんな山鉦にも負けないほど大きくて、絢爛としている。まるで輝く城塞のように見える。
P35	F.女の子の一人が鉄格子を開くと、後へ続く女の子たちが排水孔へ吸いこまれるようにして、その路地へ滑り込んでいった。 その向こうはまるで鬱蒼とした森が茂っているようだ。真っ暗で何も見えない。その暗がりの上へ目をやると、縦長の窓に橙色の明かりを点した古いビルが遠くに見えていた。小さく切り取られた空はたとえようもなく淋しい藍色をしている。
P36	G 暗い路地の中で宙に浮かんだ女の子たちは、漂うようにして浮かび上がっていく。 鈴を鳴らすような笑い声が路地にこまりました。
P37	H.餌に集まる金魚のように、先に浮かんでいた女の子たちが寄ってきて、バレエのために引っ詰めた彼女の髪を撫でまわすようにした。
P39	I.露店の明かりが街を埋め尽くして輝き、ビルの谷間のはるか彼方には蠟燭のような京都タワーが見えていた。

『宵山万華鏡』では、妹の心理状況の変化や周囲の状況の変化によって、女の子たちが金魚と思わせるような比喩表現が見られる。Eの文は妹が女の子たちと共に祭りの街を行動している時に行った情景に対する比喩表現である。女の子たちに誘われ不思議な世界に入り込んだ妹は「山鉦がまるで西洋ランプみたいに可愛く見えるかもしれない。」「まるで輝く城塞のように見える。」のように、女の子たちと出会った序盤の不安な心情とはうってかわり想像豊かで子どもらしい比喩表現をしている。徐々に妹が人間ではない不思議な存在である女の子たちの世界へ、徐々に引き込まれていく様子が読み取れる。Fの文は街並みに対する形容表現である。「その向こうはまるで鬱蒼とした森が茂っているようだ。真っ暗で何も見えない。」のように、楽しい時間から姉とはぐれた現実に戻る妹の不安な心情を濃く表している。また、「縦長の窓に橙色の明かりを点した古いビルが遠くに見えていた。」という表現は、祭りの屋台の電飾の色である橙色の光をビルが浴びており、それが遠くに見えるということは妹が別世界に迷い込んだ

ことに気づいたことを示している。一方、Iの文は姉の助けによって元の祭りの世界に戻ってきた妹が姉と共に街を眺めた際の京都タワーに対する形容表現である。Fの文と比較すると、風景に明かりが「埋め尽くして輝き」、という部分から対照的であり妹に元の世界に戻ってきたことを実感させる。また、京都タワーの形容に「蠟燭」が使われているのは姉と共に見る風景が妹に暖かみ、安心感を与えていることを表現するためであろう。このようにE→F→Iの順番で見ると妹の、夢心地→不安→安堵という心情の移り変わりに伴って、その時々に行う比喩、形容表現も妹の心理状況を濃く映し出していることが分かる。

また、女の子たちが普通の人間ではない、金魚であると匂わせていることが「排水孔へ吸いこまれるようにして、その路地へ滑り込んでいった。」や「餌に集まる金魚のように」、「赤い浴衣の袖が、鱭のようにヒラヒラした。」といった比喩表現から読み取れる。

『宵山万華鏡』はそれまでの明朗愉快な森見登美彦作品と異なり、怪談的なイメージを生かした作品である。森見は怖い話について以下のように述べている。

私はこどもの頃から臆病者であるが、いつの間にか怖い話を好むようになった。かといって怖ければいいというわけではなくて、残虐さが前面に出ていたり、殺伐としたものは苦手である。怖い話であるからこそ繊細なものであって欲しいし、自然に読み進めさせてくれる気遣いが欲しいし、その世界をありありと感じさせるような文章であって欲しいし、クライマックスでは「うひゃっ」と思わせたい。

「こども」たち 綿矢りさ『憤死』 解説

私が好む怖い話は、けっきょく気配が命である。置くべき言葉をそこに置いて、決めるべきところでピシッと決めなければ、ぞくぞくするはずが一瞬でへなへなしたものになる。

「こども」たち 綿矢りさ『憤死』 解説

不思議な女の子たちとの出会いによって妹が不気味な世界へ引き込まれていく『宵山万華鏡』は、前述したように女の子たちや情景に関する比喩、形容表現によって森見が言うところの「怖い気配」が形成されている。また、そういった怖い気配を感じさせるような表現を散りばめ、妹の心理状況や周囲の状況の変化によってその気配を高めていくことで読者は宵山の祭りで起きた不思議な出来事を、読み進めていくなかで自然に受け入れ引き込まれていくのだろう。そうして醸成された「怖い気配」は、女の子たちが別の世界へ妹を連れ去ろうとするという明確な恐怖を印象づける伏線となるのである。

第三節 森見作品におけるキーワード

第一項 お酒

森見作品と四畳半の関係性についてこれまで述べてきたが、現実世界の中にファンタジーの要素が入り込んでいきその境界が曖昧になっていく森見作品の中には「お酒」が多く登場する。2016年のP+D MAGAZINEで掲載されたインタビューでも、そういった作品の特徴とお酒という場面的要素の関係について語っている。以下は記者の質問と森見の答えである。

——『夜行』の不気味な雰囲気を決定づけているのは、なんとといっても「夜」というモチーフだと思いますが、振り返ってみれば、過去の“明るい作品”の中にもクライマックスの場面が夜に設定されていることが多かったと思います。森見さんは元々「夜型」なのでしょうか？

森見：特に「夜型」の人間ではないですね。ただし、〈自分たちの日常の世界〉と〈向こう側の世界〉が接近するというか、その2つが入り混じる場面が小説のクライマックスになることは確かに多いと思います。その2つの世界の境目をあやふやにするような場面と例えば、1つは「お祭り」、2つ目に「宴会（酔っぼらっている状態）」、あとは「夜」がある。〈向こう側〉への入り口は、我々が日常生活を営んでいる場面とは少し離れたところにあると思うので、この3つが小説によく登場するのはそれが理由かなと思います。

(P+D MAGAZINE 森見登美彦さん、10周年『夜行』を語る。掲載インタビュー)

自分の家の近所に異世界への入り口があるという感覚、なにかの拍子に自分もそちらの世界へ行ってしまいかもしれないという感覚の再現が森見作品のファンタジーであり、現実の世界とは異なる世界〈向こう側〉への扉は普段と少し違う環境に身を置くことで開かれていく。「お祭り」はいつもの道や道路に屋台が賑わい、威勢のいい声と共に神輿を担ぐ様子や道を往来する人々の声が重なったり、「夜」は日が暮れて街に明かりが灯り、見慣れた街の風景が奥行きを持った不思議な空間へと変わる。その別世界への扉を開ける、いつもと違った状態の一つに森見は「宴会(酔っぼらっている状態)」つまりお酒を飲むという描写を取り入れているのである。赤玉ポートワイン、偽電気ブラン、三鞭酒(シャンパン)など具体的な酒の名前の他、今回研究対象とした作品の中でもお酒の描写が登場する。以下はその例である。

酔うにつれて東堂は荒み、「遠慮するんじゃねえよ」「飲めよ」としきりにからむ。

私は飲めない酒を飲んで大いに酩酊した。

『夜は短し歩けよ乙女』

上京区のお医者さんだという内田さんが、「いっぱいあるから遠慮なくのんでね。」

と言って、赤玉ポートワインを注いでくれました。

『夜は短し歩けよ乙女』

私はそうやって偽電気ブランを楽しく頂きました。やがて周りの人々のざわめきは遠のいて、まるで静かな部屋の中で私と李白さんだけがお酒を酌み交わしているような不思議な気持ちになりました。

『夜は短し歩けよ乙女』

その夜、下宿に小津が遊びに来た。

二人で陰々滅々と酒を呑んだ。

『四畳半神話大系』

『夜は短し歩けよ乙女』での「私」はお酒を飲み酩酊し、また彼女もお酒を飲み始めてから三階建て電車という奇怪な乗り物に乗った李白という人物に会い紺青の空から錦鯉が大量に降ってくるという現実にはありえない光景を目の当たりにしている。『四畳半神話大系』での「私」は小津と下宿で夜酒を飲んだ後猫ラーメンを食べに屋台へと向かった際、下鴨幽水荘に住む神と呼ばれ「私」のことをなんでも知っており、人々の縁を結ぶ分厚い帳面を持った人物に出会った。いずれもお酒を飲んでから起きた出来事でありそれまでの現実世界と突如出現した異世界の境界が曖昧となっている。お酒を飲みいつもとは違う状態になったとき、現実世界に存在しながらも非現実を見聞する。森見作品においては<向こう側>の世界への扉を開けるのである。

すでに第二節第一項でお酒を飲んだ時の比喩、形容表現の特徴について述べたが、お酒は森見作品においては重要な役割を果たすものであると考えられる。

第二項 夜

次に森見作品における「夜」について考察したい。今回対象とした森見作品を研究していると物語の中で起きる出来事が多くは夜に起きていることが分かった。以下はその例である。

作品	主語	出来事
『太陽の塔』	私 飾磨	海老塚先輩、遠藤と出会う。中学生のときに埋めた夢玉を掘り返す。
『四畳半神話大系』	私	小津の師匠、老婆の占い師と出会う。黒い絨毯のような蛾の大群が飛んでくるのを目撃する。
『夜は短し歩けよ乙女』	私 彼女	李白と出会う。四階建ての電車で遭遇する。空から鯉が落ちてくる。
『有頂天家族』	赤玉先生	二代目と決闘を行う。
『宵山万華鏡』	妹	祭りの最中、不思議な女の子たちに連れ去られそうになる。

また、どの物語を読んでも、夜に登場人物らが行動し始め夜が明け始めるころにはその展開が終わりを迎えるということが多くある。例えば『夜は短し歩けよ乙女』の第一章「夜は短し歩けよ乙女」はすべて夜が舞台となった長編の話であるが、その最後は李白との勝負を終えた「彼女」が家路につくというシーンで終わり、『有頂天家族 二代目の帰朝』での赤玉先生と二代目の決闘は夜中の内に幕が下りる。またそこでは特に、新たな人との出会いや現実では考えられないような不思議な出来事が夜中に起きている。森見は夜についてのこだわりについて以下のように述べる。

夜っていうのは、日常的なものと不思議なものの境目が曖昧になるから書きやすっていうのは昔からあった気がします。夜のお祭りとか、夜の街で飲み歩いている人たちというシチュエーションも、現実と非現実が交わっても許される感じがある。

『文藝別冊 総特集森見登美彦 作家は卓上で冒険する!』

現実と非現実が交わるために、白昼堂々明るい場所はどれも似つかわしくない。妖しげな雰囲気を持つ老婆の占い師も夜の雰囲気の中でこそその神秘性が保たれ、夜という時間帯に不思議な存在である女の子たちと妹が出会うからこそ、その怖さ、不気味さがより引きたてられるのである。何が起きるか分からない、目の前が真っ暗で先が見えない夜であるからこそ、登場人物らは暗闇の中をさまよいつついつのまにか現実と非現実の間を行き来するのである。夜という舞台が持つ神秘性、恐怖、不思議さが森見作品におけるファンタジー世界を創るうえで重要なピースであるといえる。

第三項 黒髪の乙女について

森見作品においては「黒髪の乙女」と呼ばれる登場人物やそう呼ばれる対象が度々描写される。

以下は、今回の研究対象作品に登場する「黒髪の乙女」をまとめた表である。

作品	「黒髪」または「乙女」またはその両方が使われている表現
『四畳半神話大系』	<ul style="list-style-type: none"> ・ 薔薇色のキャンパスライフが黒髪の乙女がそして全世界がおれに約束される。 ・ 傍らにるのが黒髪の乙女であれば、暗がりて身を寄せ合うのも、我慢するにやぶさかではない。 ・ せめて、もう少し同士を、むしろ黒髪の乙女を、と私は思った。 ・ その当然の帰結として傍らには美しき黒髪の乙女、目前には光り輝く純金製の未来、あわよくば幻の至宝と言われる「薔薇色で有意義なキャンパスライフ」をこの手に握っていたことであろう。 ・ 「(略)もっと何かこう、ふはふはして、繊細微妙で夢のような、美しいものだけで頭がいっぱいな黒髪の乙女がいい」 ・ (略)あわよくば明石さんという黒髪の乙女とねんごろになりたいと思うなど言語道断。
『夜は短し歩けよ乙女』	<ul style="list-style-type: none"> ・ ふいに彼女が私の顔を覗き込んだ。短く切りそろえた黒髪がわずかに濡れていて、外灯の光に輝いた。
『恋文の技術』	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「長い黒髪が垂れて口に入ったりしているのが可愛い」
『四畳半王国見聞録』	<ul style="list-style-type: none"> ・ 麗しの乙女をこの四畳半に誘い込むことも可能である。

いずれも妄想しがちないわゆる腐れ大学生が行う表現であるが、「黒髪の乙女」は多くの作品では憧れの存在、理想の恋人というような位置づけである。妄想の中でしか存在しない人物の呼び名であるため、登場人物と関わりのある実在する人物に対して形容されることはない。また現実世界に存在するヒロイ的な立場である女性に対しては「彼女のような若い女性」(『太陽の塔』)などのように、淡白な広汎的な表現で終わる。一方で実在するヒロイ的な女性に「黒髪の乙女」という形容が行われる場合もある。『四畳半神話大系』では、序盤「黒髪の乙女」は「私」が輝かしい大学生活を送るために必要だと妄想する理想の存在という描かれ方をしていたが、冒頭後半部での「(略)あわよくば明石さんという黒髪の乙女とねんごろになりたいと思うなど言語道断。」という「私」の内語から、「私」にとってサークルの後輩である明石さんが理想のヒロインであることがここで明かされる。また、『有頂天家族 二代目の帰朝』では赤玉先生が想いを寄せる弁天も後々「黒髪の乙女」設定であることが明かされ、さらに『夜は短し歩けよ乙女』では「彼女」に対して「見覚えのある小柄な乙女」や「短く切りそろえた黒髪がわずかに濡れていて、外灯の光に輝いた。」のように「黒髪の乙女」という形容が使われている。

なぜ森見作品に登場する男性キャラクターの理想的な女性像は「黒髪の乙女」なのだろうか。黒髪という点については『有頂天家族 二代目の帰朝』の冒頭部の一部から考える。

「またまたそんなことを仰って・・・ほらほら美女が来ましたよ。黄金の三輪素麺みたいな金髪をご覧くださいな。」

「安っぽい化け術をひけらかすな、気色悪い！」

『有頂天家族 二代目の帰朝』

矢三郎の変身ぶりに対する赤玉先生の反応である。ここで赤玉先生が指摘する「安っぽさ」とはおそらく、矢三郎の化粧術の拙さ、技術面の未熟さに加え、化粧対象が「金髪碧眼の肉体美を誇る女性」の姿であることに安っぽさを感じている。赤玉先生が文通し思いを寄せている人間の弁天の髪色は黒であるため、相対的に見ると黒は好ましい色であり、金色の髪はどこか安っぽさを感じさせる髪色なのである。赤玉先生に限らず、他作品でも男性キャラクターと黒髪の乙女との関係が描写、記述されていることから、染色など何も手を加えず本来の髪の輝きを放つ黒髪の乙女は、森見作品における男性キャラクターらにとって純粋で天真爛漫な、理想的な女性像なのであろう。

妄想を行う男性キャラクターたちは、現実世界にいるような女性、例えば『太陽の塔』における植村嬢のように鋭い眼光で睨み男性陣の妄想世界を打ち壊してしまう女性らに対して怯えている。一方、「黒髪の乙女」とは男性キャラクターが妄想の中で作り上げ精神の安定をもたらしてくれる純粋な天真爛漫な存在の形容なのである。だからこそ「黒髪の女性」と呼ぶのではなく、作中の他一般的な女性と区別した、純粋さを感じさせる女性に対して呼ばれる「乙女」という言葉が使われていると考える。また、『夜は短し歩けよ乙女』の夜の街を歩き回った「彼女」のように、乙女らは純粋で好奇心旺盛な人物である。「黒髪の乙女」は男性らの心の拠り所になるだけでなく、外の広い世界へ連れ出し様々な経験を与えてくれる人物なのである。すでに前の章で妄想は登場人物らを狭い世界から広い世界へと連れ出してくれるものであると述べたが、好奇心旺盛な予測のできない行動をとる「黒髪の乙女」たちも、乙女を追いかける男性らを結果的に広い世界へと誘い出し、自分自身の恋する気持ちややるべきことなどを気づかせるのである。乙女という設定が物語の展開を生みだし、男性キャラクターの成長や心情の変化を促すのである。

第四章 森見登美彦と京都

今回の研究対象となった作品も含め、森見作品には京都を舞台とする作品が多い。それは、森見が学生時代に過ごした京都という街から着想を得て作品を書いてきたからであるが、京都という街について森見は以下のように述べている。

京都という歴史ある町には、私の好奇心を誘う細い横道が縦横無尽にあり、由緒正しい神社仏閣があり、天狗の住む山々があり、古い森と川、そして謎めいた祭りがある。歴史のない街からやってきた私にとって、この街は好奇心をそそる迷宮のような街であると同時に、決して辿り着いてはならない不気味なものが中心にある街のように感じられた。その街に七年住んだおかげで、私は京都を舞台にして小説を書き、小説家になることができた。

台湾雑誌「総合文学」第三回コラム

もちろん、いくら小説が個人的妄想の産物だとはいえ、虚空から生まれるわけではない。必ず現実の材料がある。京都という街には、そういう妄想のネタになるものがたくさんあるのは確かだ。歴史、風景、人々の暮らしが絡み合い、タネを続々と生み出してくれるのだろうか。

「週刊朝日」2014年3月7日号 京都と偽京都

森見は自身の学生時代で経験したことの回想に加え、当時住んでいた四条烏丸など京都の街を歩き回り、好奇心を持って妄想する森見独自の視点を通して京都の街を見つめることで、一見何気ない京都の風景も新たな意味を与えられたり、現実と虚構が共存していくなかで新たな京都の一面が顔をのぞかせるのである。そこで妄想したことは小説執筆のタネとなり作品の舞台となる京都に反映されていく。この森見独自の妄想によって生まれたと考えられる作品内の京都の街の描写をいくつか取り上げる。以下はその例である。

四条河原町界限ではとっくにクリスマスファシズムの嵐が吹き荒れていることは私にもよく分かっている。だからこそ私は、十二月以降に四条河原町には足を踏み入れないことにしている。しかしまさか敵の魔手が、ここ東大路通りにまで及んでいるとは思ってもいなかった。

『太陽の塔』

偽右衛門八坂平太郎も、我が長兄の矢一郎とともに、四条大橋のたもとに待機していたらしい。また、鴨川の対岸で燈籠のように輝く「東華菜館」の屋上では、岩屋山金光坊がひとり老酒を傾けて旧友の決闘が終わるのを待っていた。

『有頂天家族 二代目の帰朝』

岩屋山志明院の一带は賀茂川の源流地として知られているが、その山中には幾つもの龍石が埋まっている。その石から滲み出る水を龍水といい、天狗たちはいわゆる精力増強剤として愛用してきたという。

『有頂天家族 二代目の帰朝』

日も暮れた今出川通りは賑やかで、車のヘッドライトやテールランプがぎらぎらと賀茂大橋に詰まっている。橋の太い欄干に点々と備えつけられた橙色の明かりがぼんやりと夕闇に輝いているのが神秘的であった。今宵はやけに賀茂大橋が大きく感じられる。

『四畳半神話大系』

そこで描かれる京都は現実とは異なりファンタジーの世界が融合した京都であるが、そんな京都で登場人物らは現実とファンタジーが混ざった世界で不思議な出来事や人物らに翻弄されながらも生き活きと躍動し自分自身の生き方について考え行動を起こしたりするのである。四畳半の部屋に閉じこもり妄想ばかりにふけていた大学生や天狗らにとって、現実世界の一般的な京都が舞台であった場合、その後何の展開も起きずに腐っていっただけであっただろう。森見は、人形浄瑠璃など古くから芸能や作品の舞台ともされてきた、歴史を感じさせその街並みに趣を感じる京都に目を向け物語の舞台とし、登場人物らがファンタジーに巻き込まれていくという展開を違和感なく、その境界を曖昧にしているのである。その結果、登場人物らが現実世界とファンタジーの世界をいったりきたりするというような森見作品のおもしろさが生まれていると考えられる。

第五章 結論と今後の展開

第一節 結論

今回の研究では森見登美彦作品における表現特性、特に比喩、形容表現について考察を行った。第一章第一節 研究動機で述べた森見作品の面白さとは、ズレやオーバーさを感じさせる特徴的な比喩、饒舌な形容表現にあるという結論に至った。研究対象となった作品冒頭部における比喩、形容表現は喩詞と被喩詞言葉同士が性質上結びつきにくい表現が多く見られた。それは酔っている時や不安な時など、登場人物らの心理状況や周囲の状況によって変化していることが分かった。また、このような登場人物らが行う比喩、形容表現や古風な言い回しは京都という舞台でこそ活きているとも考えられる。第四章 森見登美彦と京都で森見登美彦と京都の関係性について述べたが、東京など街並みが時代とともに進化し大きな変化を遂げた街が舞台であった場合、どこか違和感を覚えるだろう。建造物や飲食店など街全体にどこか歴史を感じさせる京都であるからこそ、その独特で古風な言い回し、表現をする登場人物らが浮くことなく溶け込んでいる。森見自身の京都を練り歩いた経験と豊かな想像力によって、現実とは異なる新たな京都という街を構築していくのである。

そして、ズレやオーバーさを感じさせる特徴的な比喩、形容表現は妄想とも深い関連があることが見えた。四畳半という狭い世界に籠もり、外の世界に向けて妄想しがちな登場人物らは、その視点から捉えた風景や人物らをズレやオーバーさを感じさせる比喩、饒舌な形容を行い現実の世界と非現実の世界が入り乱れる世界を読者に向けて提示していた。現実にはありえない世界を、言葉と言葉の意味が結びつきにくい、豊かな想像によって生み出された登場人物らの斬新な表現によって森見作品の作品世界を作り出している。森見作品の特徴といえる現実とファンタジーの境界の曖昧さを感じさせるうえで、このような妄想と比喩、形容表現の関連は作品世界を支える重要なものであったといえるだろう。

第二節 今後の展開

今回の研究では図書館と手元にあった七つの森見作品を研究対象としたが、他にも多数の作品があるためそれぞれの作品の比喩、形容表現の特性についても研究を行っていききたい。また本研究でも引用したインタビューの中で森見が触れていたが、森見が現実と非現実の境目を曖昧にする舞台の一つに「祭り」を挙げており、今回の研究対象の作品では『宵山万華鏡』の祭りと下鴨納涼古本まつりしか登場していなかったため省略した。しかし研究対象外であった作品の中に祭りが登場するかは確認できていないので、今後は他作品も読み祭りについても検討を行っていききたいと考える。

また、今回森見作品を研究していると、「樋口」「羽貫」や「芦名」など異なる作品にも関わらず複数作品に登場する人物が多く見られた。それぞれの物語世界におけるその登場人物の位置づけや行動、言動などを比較しその表現の違いについて考えていきたい。加えて、『有頂天家族 二代目の帰朝』でメインとして扱われていた狸について、他作品でも狸がしばしば登場することから、作品のファンタジー世界との関連や森見自身の位置づけについて検討を行っていきながら、狸がよく登場する必然性についても研究を行っていききたい。

終章 おわりに

今回の研究は私が大学一年生の時に出会った森見登美彦の『夜は短し歩けよ乙女』という作品を読んだことがきっかけで始まった。比喻、形容表現がそれまで読んできた小説のどれにもあてはまらない新鮮さを感じとても面白く感じた作品であった。その漠然と感じた面白さの本質を、本研究を通して少しでも覗くことができたと感じている。今後も森見登美彦作品を読み今回の研究で明らかになった表現特性やその独特な物語世界に浸り楽しんで読み進めたい。

最後になりますが、今年はコロナ禍という世間的にも大変厳しい状況でオンラインを通したゼミが多かったですが、その中でも親身に何度もアドバイスを頂いた野浪先生には大変感謝しております。特に分析の新たな観点について助言を頂いたり、研究する上で有益な参考文献を紹介して頂いたり、リモートで一人研究している私にとって非常に心強かったです。

またゼミ生のみならずは毎回のゼミで大変刺激をもらいながら、論文の執筆に取り組むことができました。学会でマイクを通した桜ソングの曲紹介は大変緊張しましたが、みんなの適任であるという後押しの声にも助けられ、なんとかやり遂げることができました。野浪ゼミで互いに切磋琢磨した経験を今後の教員生活だけでなく、日常生活においても活かしていきたいと思います。このメンバーで野浪先生最後のゼミ生として走り抜くことができ、嬉しく思っています。ありがとうございました。